朝日新聞 2010年(平成22年)8月20日 金曜日 13版 22

環境 エコロジー

すべての種は平等である

えこ事記 希少種 2

保護対象 「貴重な種」から「多様性」へ

「野生状態で撮影されたニホンカワウソ」であることが確実とされる写真＝1973年8月、高知県南西部、今泉忠明氏撮影（Nature Production）

ニホンカワウソ

37年前の夏、高知県大月町の磯で、すぶぬれの獣が暗い岩場を歩いていた＝写真。一野生の生きたニホンカワウソを撮影したと間違いなく言える唯一の写真です。東京農業大学の安藤元一教授はこう解説した。

ニホンカワウソは、明治期の中ごろまで全国の河川でみられた。だが、毛皮目的で乱獲され、激減。細々と残った四国でも、毛皮などの生存の確たる証拠があるのは1980年代前半までだ。国はまだ「絶滅」とはしていないが、「90年代には滅んだだろう」と安藤さんは言う。

「絶滅の最後の一押しは自然の劣化。60、70年代の高度経済成長期に魚類が激減したことでしょう」

野生生物種を守る主な法律制度は92年まで、文化財保護法に基づく天然記念物制度と鳥獣保護法だけ。ニホンカワウソは特別天然記念物だったが、実質的な対策は捕獲禁止だけ。結局、それでは守り切れなかった。

ブナ林

「うそ～ん。ここならあってもいいと思ったのですが」

7月、神奈川県西部に広がる丹沢山地の鍋割山（1273メートル）山頂付近で、アマチュア植物研究者の城川四郎さん（84）はうなった。国が絶滅危惧Ⅱ類（Ⅰ類は絶滅の危機にひんする種、Ⅱ類は危険が増大している種）に指定するマツノハマンネングサは見つからなかった。主にブナの幹に生える着生植物だ。

丹沢では80年代から標高千メートル以上に生えるブナが枯れ始めた。鍋割山は比較的無事な方だが、それでもブナは減って明るい林床が開けていた。

欧米では50年代から、絶滅の危険がある生物を列挙するレッドデータブックの作成が始まっていた。だが、日本で初めてレッドデータブック（植物版）作成に着手したのは、80年代後半、日本自然保護協会などが主体だった。

実動部隊の一人、当時は東京大助手だった矢原徹一九州大教授は「生物の異変を最も知っているのは、自然を愛し、つぶさに見てきたアマチュアだ」と、全国のアマチュアに協力要請し、情報収集した。

89年公表の結果は、学者たちに衝撃を与えた。日本の植物種の17％、895種が絶滅の危険にさらされていた。「学術的に重要」な種だけを天然記念物として守ることではカバーできない膨大な種数だった。

民間を追う形で環境庁（当時）も同年末、動物版を発表。ニホンカワウソやアオウミガメなど628種が、絶滅のおそれのある動物として示された。その6年前に発見された日本一大きい甲虫、ヤンバルテナガコガネも注意地が開発で奪われているとリストに盛り込まれた。

植物版レッドデータブックの緒言は「一種たりとも絶滅させてはいけない」と訴えていた。だが、矢原さんは表現的だった。「そんな価値観を、社会は受け入れてくれるのだろうか」

種の保存法

そこに突然、追い風が吹いた。92年に開かれた地球サミット（ブラジル・リオデジャネイロ）で生物多様性条約が署名された。同年、日本でも「種の保存法」が成立する。

種の保存法は、保護するか否かは絶滅の危険度だけで判断するというもの。当時担当課長の菊地邦雄法政大教授は「すべての種を平等に扱い守る。多様性の尊重を盛り込んだ」と話す。

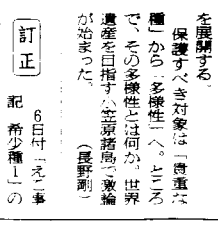
それでも「期待した包括的な法律ではなかった」と、世界自然保護基金ジャパンの草刈秀紀さん。国会議員に新法を求める活動を展開、2008年に全生物種の保存と多様な環境の保全をうたう生物多様性基本法が成立した。

法の精神を実践に移す自治体も出てきた。千葉県は県南東部の鬼泥川の全流域で、生物すべてが豊かに暮らせる環境づくりを展開する。

保護すべき対象は「貴重な種」から「多様性」へ。ところで、その多様性とは何か。世界遺産を目指す小笠原諸島で議論が始まった。

（長野剛）

枯れて倒れたブナ（手前）＝神奈川県山北町の鍋割山



上国が絶滅危惧Ⅱ類に指定するマツノハマンネングサ＝神奈川県立生命の星・地球博物館提供

下国が絶滅危惧Ⅰ類に指定するヤンバルテナガコガネ

訂正 6日付「えこ事記 希少種1」の記事で、「ペッコウトンボ」とあるのは「ショウジョウトンボ」の誤りでした。訂正します。

12版▲ 2007年(平成19年)10月1日 月曜日 朝日新聞

お宝発見 ニホンオオカミの本剝製（和歌山大）

動物が生きている時の形を再現したものを「本剝製」という。絶滅したニホンオオカミでは国内に3体だけ。うち1体を和歌山大が持つ＝写真。

前身の師範学校時代の1947年、標本を整理していたら、ホコリだらけの犬のような剝製が出てきた。ある教員がなぜか気になって残しておいた。48～50年に上野動物園の技師らが鑑定し、ニホンオオカミとわかった。

いわれを引き継ぐのは教育学部の高須英樹教授（生態学）。ただ、不確かな点も多い。作ったのは師範学校の教員らしい。捕獲地は奈良県の大台ケ原山系か十津川村らしい。どちらも、なぜそう言えるのかは不明だ。

もともとは、いかにも素人が作った「ニホンオオカミに似ても似つかないもの」だったという。81年、大学が約100万円かけて作り直し、精悍な姿に生まれ変わった。

不思議なのはペニスの存在。専門家の見立てでは、乳首が発達しているので、本当はメスとみられる。作り手が、あえて迫力のあるオスにしたのか。今となっては誰もわからない。

（市原研吾）

メモ ニホンオオカミの本剝製があるのは、国内ではほかに国立科学博物館（東京）と東京大。和歌山大のものは体長約1㍍。01年、長年潰かれていた大学の研究室から和歌山県海南市の県立自然博物館に引っ越した。年に1カ月程度、公開されている。